

CMS として Wiki を用いた (仮称) 土木バーチャル博物館コンテンツの検討

北海道教育大学 正会員 今 尚之

1. はじめに

土木学会では、情報の提供、利活用環境の充実を目的に、土木図書館の整備に取組み、土木図書館委員会を中心に、電子化の推進や史料の収集・保存、利活用に取り組んできた。その一つとして、土木分野の技術や成果などを社会一般にわかりやすく提供し、社会とのコミュニケーションを進展させる目的を持った「(仮) 土木バーチャル博物館」の構築がある。

「(仮) 土木バーチャル博物館」は、土木の営みの結果としての「もの」をデジタル資料で展示(提供)し、「もの(デジタル資料)と現物へのナビゲート」を媒介として「土木」を知ることなどを指すものとして、そのコンセプトが検討されてきており、早期の構築と公開が待たれている。しかし、そのためには、コンテンツの作成と同時に、更新、維持・管理を行い継続的に情報提供を行うための予算や人手、作業時間などの確保が課題となっている。

そこで、土木バーチャル博物館の具体化に向けて、それらの課題解決として、CMSを導入することとし、提供コンテンツのひとつとして、いわゆるWeb2.0の考え方を援用しながら、Wikiを用いたパスファインダー型選奨土木遺産紹介コンテンツを検討したので報告をする。

2. (仮) 土木バーチャル博物館における選奨土木遺産紹介コンテンツ

(1) 土木学会選奨土木遺産

土木学会選奨土木遺産制度は2000(平成12)年度より始まったものである。わが国の国土造りに貢献した土木施設・構造物に光を当てることで、土木の営みを正しく認識し、伝えることを目的としている。これまでに全国で100を超える構造物や施設が選奨されてきた。また、日本の近代土木遺産2800選にリストアップされたものや各支部から推薦されたものに加え、地域公募も始まり、選奨された土木遺産の数は年々積み増しされている。その結果、社会的な関心や知名度も上がり、最近ではまちづくり資源として市民活動の対象や産業観光の対象としても関心が持たれるようになってきた。

しかし、選奨土木遺産の情報提供は支部毎に異なり、内容についても精粗、差が大きい現状がある。

(2) 社会とのコミュニケーション機能の重視

選奨土木遺産の紹介は、土木の成果を提示するものとして位置づけられる。

さらに、バーチャル博物館のコンテンツから、土木遺産について百科事典的な知識を得るだけに終わらないようにすべきである。市民一般が、現地を訪れたり、関係する機関が提供する情報や研究者、技術者にアクセスすることで、土木の社会化、土木と市民のコミュニケーションを促進する機能は極めて重要なものと考えられる。土木バーチャル博物館としては、バーチャル(デジタル化された資料)と現実(現物)をつなぐ橋渡し機能にもおおいに着目すべきである。

表1 利用者から見た土木バーチャル博物館として提供が期待される情報

項目	情報の内容	追加・修正など更新にかかわる課題
対象土木遺産についての知識情報	対象土木遺産の概要、技術、系譜、地域とのかかわり(郷土史的な評価など)	一度作成するとそれほど頻繁ではない。しかし、新しい事実がわかった時などには追加、修正の作業が発生する。
土木遺産へのアクセスに必要な情報	所在に関する情報	場所、見学の可否、交通、見学の容易さ
	情報源に関する情報	書籍、論文、ホームページ、参考書、研究者、関係者、NPO、市民活動、観光
		地図情報、交通情報などは変更が多いため、頻繁な更新が必要。 新しい情報源の発生などが多いので頻繁な更新が必要となる。特に外部情報については、追加・修正に労力がかかる。

キーワード 土木バーチャル博物館、パスファインダー、参加型コンテンツ、CMS、Wiki
〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目 TEL&FAX:0166-59-1376, nowkon@nifty.com

以上を踏まえ、予想される利用者として市民一般を考えると、土木バーチャル博物館に提供が期待される情報は、表1に示したように、①関心を持った土木遺産に関する知識を得るための直接的な情報(百科事典的利用)と、②関心を持った土木遺産へのアクセスに必要な間接的な情報(カタログ・ガイドブック的利用)に大別されよう。

これらの情報は、ある統一したフォーマットによって提供されることが、分かりやすさと利便性向上から必要なことである。また、情報の入力や更新など、維持・管理を行うためには人手や時間が必要であり、専従者を配置することはコストがかかる。また、特定の個人のボランティアで継続できるものでもない。全国に広がる選奨土木遺産に関する情報を集め、整理して提供するためには、全国で活躍している土木学会会員が参画するコミュニティを形成し、コンテンツの充実を図る必要がある。

3. CMSとしてWikiを導入したパスファイン

ダー型選奨土木遺産紹介コンテンツ

(1) CMSとしてのWikiの導入

CMS(Content Manegimet System)はコンテンツ管理システムと呼ばれ、Webで提供される情報(コンテンツ)やレイアウト情報などを一元管理するために導入されている。近年個人利用が盛んとなったblogは日付による文書管理の考え方が導入されたCMSといえる

一方、Wikiは文章などを構造的に整理することに適したCMSである。例えば、Wikipediaなどに見られるようなオンラインで執筆に参加、編集を行う辞典などの構築、管理に用いられている。

Wikiは、表2に示したように、バーチャル博物館における、選奨土木遺産紹介コンテンツに求められる要件に対して必要な要件を満たしている。Wikiにはいくつかの派生があるが、オープンソースであること、日本語の利用が可能であることからPukiWikiを採用することとした。

(2) 情報提供形態としてのパスファインダー型選奨土木遺産紹介コンテンツ

選奨土木遺産に関する情報源にアクセスするための情報を充実させ、統一した書式での情報提供のた

表2 コンテンツ作成要件とWiki

コンテンツ作成の要件	Wikiの特徴による対応
土木学会会員の参画による情報充実が可能	・全てのページを一定のフォームから更新が可能
様々な情報源にリンクがなされている	・WikiNameにより、自動リンクが可能
利用者の多様な利用に応えるための検索	・全文検索機能が提供されている
維持・管理が容易	・凍結・差分・バックアップなどの機能があり編集をコントロールできる

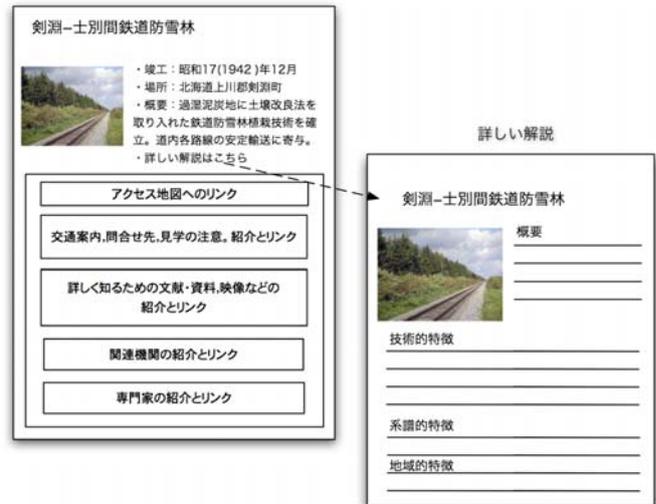


図1 パスファインダー型選奨土木遺産紹介コンテンツ

めに、パスファインダー型のフォーマットとすることを検討した。

パスファインダーは、図書館などの情報サービス機関の利用者を対象に、主題毎に、各種機関や団体が公開している情報源へのアクセス方法の説明や、インターネット上で公開されている図書、雑誌記事や新聞記事等のデータベースを紹介するなど、情報源への道しるべとなる手引きをいう。

土木バーチャル博物館でのイメージサンプルを図1に示す。

4. まとめ

「(仮称)土木バーチャル博物館」のコンテンツ作成における課題解決に向け、選奨土木遺産の紹介をサンプルに、いわゆるWeb2.0の導入を提案した。今後は、目的など理念を共有した、コンテンツ充実に向けたコミュニティづくりが課題である。関係する土木学会委員会などとの連携を進めるためにも、検討を行ったコンテンツの具体化を進めたい。